

◎市民に開かれた京浜臨海部

①鶴見区における臨海部の現状と展望

■橋本 勝

1 鶴見臨海部における市民開放型施設の立地について

鶴見区は京浜工業地帯の中でもその中核として、昭和期の日本の高度経済成長を支えてきた地域である。しかし、当時のものづくりの主流であった鉄鋼業、機械工業、化学工業など重厚長大といわれる産業の影響が、今もイメージとして内外に強く残っているようである。立ち並ぶ工場の煙突から昇る煙、そうしたまちの風景から地域の住民をはじめ「鶴見」とは「工場のまち」「灰色のまち」という観念が強く印象づけられてきたのである。しかしその流れは変わりつつある。

近年、工業等制限法など企業立地関連法令等の規制から、新しい工場等の立地が制限され、また企業の国際的経営戦略による生産拠

点の海外流出などにより、産業の空洞化が進み、京浜臨海部のものづくりは衰退の途をたどってきたところである。

一方、京浜臨海部に残った企業は、従来の重厚長大産業のイメージを払拭し、より市民に身近な産業拠点として存在すべく、緑化等の環境整備や企業施設の市民開放を進め、現在に至ってきている。ここではまず、市民に開かれた企業の事例を紹介し、産業界から市民へのアプローチが進みつつあることを認識しておきたい。

①東京電力横浜火力発電所「トウイニーヨコハマ」

鶴見区大黒町にある東京電力横浜火力発電所内に設置されたオープンスペースで、平成九年十月から供用開始されている。

名称の「トウイニー」は、横浜火力発電所の新しい発電施設でシンボルとなっている二本の煙突、「トウインタワー」から名付けられた。この「トウインタワー」は、従来の発電所の煙突の象徴である紅白のカラーリングから脱し、横浜のイメージである白と青を基調とした色彩が施されており、遠目に見てもスマートな印象を与える。

当該施設は工場内の広大な敷地を有効に活用し、シアター部分と屋外施設から成っている。

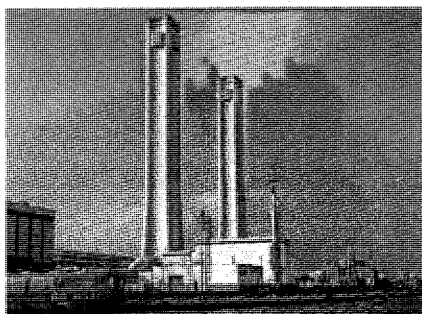
三階建ての「トウイニー・シアター」には、多目的ホールや百五十人収容の劇場型ホール、「フリーフロア」のほか、生活と電気、環境とエネルギーなどが分かりやすく学べる「電気のコナー」が配置されている。

一方、屋外施設では、軟式野球場一面とフイー

- ① 鶴見区における臨海部の現状と展望
- ② 神奈川県臨海部の特色とまちづくりの課題

- 1 鶴見臨海部における市民開放型施設の立地について
- 2 京浜臨海部の再編整備と連動した副都心機能の整備について
- 3 市民の活発なまちづくり活動について

横浜火力発電所（トウイニーヨコハマ）



ルドアスレチックもある「なかよし広場」、くつろぎの場となる「いこいの丘」が設置されている。

② 塩水港精糖「横浜さとうのふるさと」

塩水港という名前は、明治時代に創業の地である台湾の地名から取ったものだそうである。一時戦災により中断したものの、戦後製糖事業を復活し、現在に至っている。

近年は製糖事業のほか、戦前から培った発酵ファインケミカルの素地を生かし、オリゴ糖の研究を進め、乳果オリゴ糖を主成分とする新甘味料を製造・販売している。

市民開放施設は、平成九年四月に、鶴見区大黒町にある工場敷地内に「横浜さとうのふるさと」としてオープンした。

ここでは、市民に砂糖を正しく理解してもらうことを理念とし、生活における砂糖との上手な付き合い方を提唱している。

施設は砂糖に関する知識を学ぶ「シュガーハウス・セミナーハウス」、砂糖の歴史を学ぶ「ふるさとロード」のほか、原料糖を見学できるスペースや、立地条件を生かし横浜港を一望できる「サトウキビ・ハウス」などで構成されている。

コンパクトな企業博物館であるが、案内体制も親切で、企業を身近に感じられる施設となっている。

③ 東京ガス「環境エネルギー館」

鶴見区末広町の中央部、理化学研究所の「ゲノム科学総合研究センター」予定地の南に、船の形をした建築物が建てられている。

この「環境エネルギー館」は、エネルギー事業者である東京ガスが、「環境」に深く関わる立場から、市民への環境学習の場を提供する目的で設置された。また、この施設は、子供たちの持つ「センスオブワンダー（不思議に思う心）」を大切にしたい体験型学習を大きなコンセプトとしている。

現在工事は順調に進み、本年十一月オープンの予定である。

六階建ての建物のうち、メインとなるのが四階の展示フロアである。ここでは地球の自然の営みを大画面で上映する「シアター」、大気や水をはじめ、地球環境の循環を考える「みんなみんなつながっている」コーナー、ゴミや環境について身近なところから考える「わくわくヒントタウン」、テレビスタジオのようなステージでアトラクションを上演する「地球大好き放送局」などが設置される。

このほか環境問題、環境教育に関する図書や映像を公開する「環境情報センター」、環境や生活をテーマにした自然遊びや工作が体験できる「ワークショップルーム」があり、屋上にはジオトープによる自然体験のプロگرامも用意されている。

④ 東芝京浜事業所「海芝公園」

京浜臨海部を周回し、主に通勤・通学の人々を運ぶ鶴見線。その海芝浦駅は、東芝京浜事業所の敷地に接し、社員以外はほとんど利用しない駅であった。この駅に係る自社敷地を一部開放し、できたのが「海芝公園」である。

鶴見線の改札からは出ることができないが、

この公園の南側正面には「鶴見つばさ橋」が位置し、眺望には絶好の場所であるため、カメラを持った観光客も訪れるようになってきている。

⑤ キリンビール「キリン・ピアビレッジ」

日本のビール発祥の地は横浜である。明治時代にアメリカ人コーブランドが、中区の山手にビール工場を造ったのが始まりで、これを継承したのが現在のキリンビールである。

生麦工場は、広い敷地内にきめ細かく緑化がなされ、遊歩道として散策するにも魅力的な場所となっている。

来館者に人気なのが、「ブルワリーツアー」と呼ばれる工場内の見学コースで、ビールの歴史から醸造工程、出荷までを見学することができる。ツアー終了場所の外は公園になっており、来館者の憩いの場でもある。

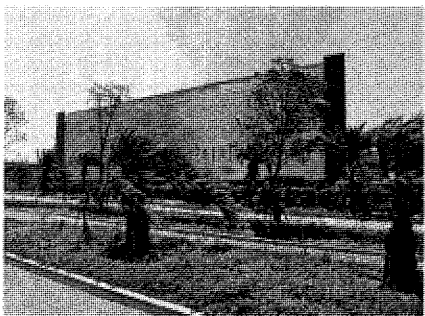
工場内にはレストランもあり、四季折々のビールを味わうことができることも魅力の一つとなっている。

これら企業の努力により、大黒町、末広町を中心に市民開放の動きがたがなりつつある。また、同地域においては、行政による市民利用施設も立地している。

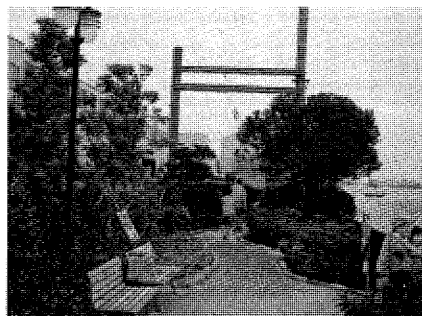
大黒ふ頭においては「大黒海づり公園」や「大黒ふ頭中央公園」が存在し、横浜港の顔となった「ベイブリッジ」、さらに橋上からの眺望が可能な「スカイウォーク」がある。

末広町においては、若者や家族連れの人気も高い、高齢者保養研修施設「ふれーゆ」、また環境事業局鶴見工場に隣接する「鶴見リ

ふれーゆ



海芝公園



環境エネルギー館（完成予想図）



サイクルプラザ」が立地する。

今後はこれら市民開放型の企業施設と市民利用施設のリネケージを進め、国際的な産業拠点となる末広町を中核に、大黒町、大黒ふ頭へと、市民にアピールする「ものづくり」のまちのイメージの浸透と、市民が憩い、気軽に訪れることができるような施策の展開が望まれる。ここにおいては、「産業と市民のふれあい、相互理解」が重要なキーワードになると考えられる。

なお、このような臨海部の変化に着目し、鶴見区のイメージアップを行おうとする取組みが進められている。

「いいまち鶴見」運動は、町内会や企業、様々なテーマコミュニティなどを包含し、いわば産業を含む区民全体で取り組む、鶴見区のイメージアップ運動である。

現在、「クリーンアップ」「花と緑」「魅力づくり」「広報」をテーマに活動が行われているところだが、この「魅力づくり」の活動の中で、鶴見の臨海部について、広く内外にアピールする方策が検討されている。

また臨海部には、ここに紹介した施設のほか、海や橋といった優れた景観が一つの資産になっている。こうした景観と企業からのアプローチを、区民自らがコーディネートしていくことにより、外から見て分かりやすい「鶴見」、市民にとって魅力的な「鶴見」が演出されるものと期待している。

2 京浜臨海部の再編整備と連動した副都心機能の整備について

京浜臨海部が国際的な研究開発拠点、新産業創出の拠点として再編整備が進められることに伴い、その玄関口となる鶴見駅周辺の機能強化が必要となってきた。鶴見駅は現在も通勤・通学等のための交通の結節点として、大きな役割を担っているところであるが、今後内外の研究者や新たな就業者が鶴見駅を利用していくことを考慮すると、今の鶴見駅周辺には物足りなさを感じざるを得ない。

副都心である鶴見が、今後とも市内の産業の拠点としてその役割を担うためには、何より副都心としての機能集積が必要である。例えば多くの研究者等が集うコンベンション機能や、宿泊機能の整備、交通機能の増強などである。また、鶴見区は鉄道や河川により区域が分断されていることもあり、線路の北側丘陵部地域と南側の産業地域では生活のあり方も微妙に異なっている。将来的にはこれらのエッジを取り払い、区民の交流とにぎわいの一体化を図る必要があるだろう。

さらに駅周辺と臨海部の中間にあたる地域には、木造住宅などが密集した地域が広がっている。特に研究開発・産学交流拠点となる末広町への最寄り駅である鶴見線小野駅周辺は、既成市街地の整備とともに、隣接する鶴見工業高等学校の改築・改編や交通アクセス

の向上を含めた、一体的なまちづくりが期待される。

3 市民の活発なまちづくり活動について

副都心の整備については、企業と区民による熱心なまちづくり活動が行われている。

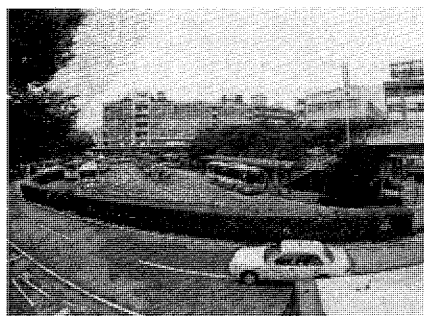
「鶴見副都心整備推進委員会」は、平成八年度に発足し、副都心としての機能集積・拡充の必要性を、「鶴見駅周辺整備への提言」という形で示した。この提言はあくまでも区民の夢を描いたものであるが、一つの方向性を提起したものと考えられる。

また現在は、推進委員会の下部組織「区民活動部会」により、区民自らの手による駅周辺の魅力づくりと一般区民への意識の高揚を目標に、活発な活動が展開されている。

以上、鶴見臨海部の状況と、その変化に対応した副都心整備の必要性について述べたが、区内にはなお多数の企業が立地している。これらの企業が市民へのアプローチを時代の要請として真剣に検討されることを望むとともに、副都心から臨海部へと都市の魅力が広がり、つながっていくことを強く願う次第である。

△鶴見区市政推進課企画調整係長▽

鶴見駅周辺



鶴見リサイクルプラザ

